平成１９年度事業報告

ひとはくトピックス

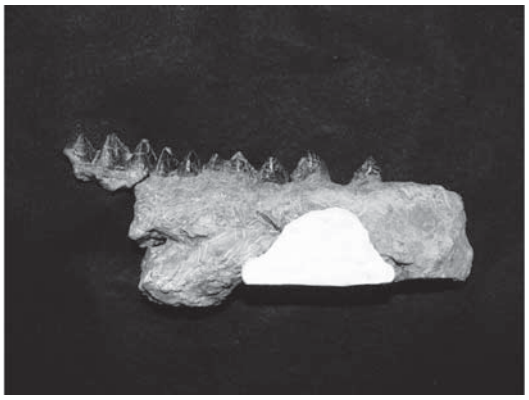
1 竜脚類の環椎および歯を新たに発見！

2006 年(平成 18 年)8 月に村上・足立両氏により丹波市山南町から恐竜の仲間である竜脚類の化石が発見された。この竜脚類の化石はほぼ一体分が埋蔵されている可能性が高く、数次にわたる発掘が計画されているが、その第二次発掘が 2007 年(平成 19 年)11 月～2008 年(平成 20 年) 3 月に行われた。第一次発掘では尾椎（尻尾の骨）から腸骨（腰の骨）と骨がほぼ関節した状態で発掘されたが、第二次発掘ではそれに続く胴体部分の骨、肋骨十数本が発掘された。これらに加え第二次発掘では、環椎と未使用の歯が発見された。環椎は最も前に位置する頚椎（頚の骨）で頭骨と関節するが、より後ろの頚椎と比べると非常に小さく、そのため竜脚類では他の頚椎にくらべ環椎が発見されることは世界的にも稀である。最も発見しにくい環椎が見つかったので第三次発掘ではさらに他の頚椎が発掘され、頚椎全てが見つかる可能性が出てきた。また未使用の歯は、それが植わっていた顎が近くに埋まっていることを示唆している。第一次発掘では頭骨の一部である脳函が発見されたが、未使用の歯の発見により第三次発掘ではさらに多くの顎などの頭骨の部品が出てくるのではと期待が膨らんでいる。

2 丹波市山南町に「ひとはく恐竜ラボ山南ルーム」がオープン！

丹波市山南町で行われた竜脚類化石の発掘では、化石骨を含む巨大な岩塊が岩盤から切り出された。こうした化石を含む岩塊は、崩れないようにプラスタージャケットと呼ばれる石膏の保護カバーをかけてから岩盤から切り出す。発掘後には、このプラスタージャケットを開封し、岩塊から化石を取り出し、丁寧に化石に付着している岩石を除去する作業が必要である。こうした作業をクリーニングと言い、大変根気と熟練の要る作業だが、大変やりがいのある仕事でもある。発掘には大勢の方々にボランティアとして参加していただき、博物館と地元の方々が一緒になって発掘を成功させたが、クリーニング作業も、地元の方々と一緒に進め、その様子をさらに多くの方々に見ていただく必要があるだろう。こうしたねらいのもと、丹波市によりひとはく恐竜ラボ山南ルームが山南町に 2007 年(平成 19 年)12 月 1 日に開設された。山南ルームにはひとはくの研究員が技術指導のため定期的におとずれ、地元の方々と一緒に恐竜化石のクリーニングをすすめている。その様子はガラス越しに見て頂くことができるため、山南ルームは多く人が訪れる丹波市の新名所となっている。

3 三田市から新種の化石哺乳類サンダタンジュウが発見される！



2004年(平成16年)に三田市富士が丘の道路の切り割り(法面)に露出する神戸層群という地層から約3千7百万年前の哺乳動物の化石が本館研究員により2種類発見された。林原自然博物館の鍔本博士らと共同研究を進めた結果、そのうちの一つ、頬歯付き下顎骨は炭獣類の新種サンダタンジュウ（Bothriodon sandaensis）であることが判明、2007年(平成19年)8月に地球科学の専門誌Island Arcに論文が掲載された。炭獣類は約4千万年前から250万年前にかけてユーラシア、北米、アフリカに分布していた偶蹄類である。炭獣の“炭”は石炭のことで、この仲間の化石が炭田で初めて見つかったことに由来している。最近、カバは炭獣類の一部から進化したとする説が有力となっている。海外のBothriodonと比べると、三田の新種はこの属でも初期のものであることが分かる。1999年(平成11年)にもザイサンアミノドンというサイの化石が神戸市北区赤松台と上津代に露出していた神戸層群から本館研究員により発見されており、国内ではまれな3千万年前以前の哺乳類化石が、将来神戸層群から再び発見される可能性がある。

4 岩槻邦男館長が文化功労者に！

岩槻邦男館長が平成19年度文化功労者に選ばれた。本顕彰を受けることになった主な理由は、まず、長年にわたってシダ植物の系統と分類に関する研究を推進し、日本の植物分類学を世界レベルへと押し上げた功績が認められたことである。また、在野の研究家と協力しレッドデータブック（絶滅のおそれのある野生生物の情報をまとめた本）の作成を行ったこと、そして、生物多様性の保全など地球環境問題への貢献が認められたことによる。

今回評価された功績は大学で教鞭をとっていた頃のものであるが、その顕彰理由はいずれも博物館の活動に直結する。植物分類学者であり生物多様性分野を振興する館長が本顕彰を受けたことは、「わが国において博物館活動を振興すべし」という大きな流れが表面に現れはじめた結果だと言えよう。

5 博物館で大学院生が研究を始める！

2007 年 4 月より、人と自然の博物館をキャンパスとした大学院教育がスタートした。この大学院は兵庫県立大学の環境人間学研究科前期課程に新しく設置された「共生博物部門」である。共生博物部門は生物多様性分野と環境戦略分野からなり、県立大学の自然・環境科学研究所に所属する 10 名（2008 年 4 月からは 11 名）の教員が学生の指導を担当している。この部門では、生物多様性保全の観点から人と自然の関係性の本質を統合的に理解し、地域社会において人と自然の共生のあり方を提案する専門家の育成をめざす。フィールドワークを取り入れた実践的な活動と大学院教育をリンクさせた特色あるカリキュラムを組み、授業は社会人入学に対応できるように集中講義形式を採用し、土・日曜日に開講の授業を履修するだけで単位の修得ができる。初年度は社会人 2 名を含む 8 名（定員は 6 名）が入学した。院生たちは博物館以外に、兵庫県立コウノトリの郷公園と兵庫県森林動物研究センターもキャンパスとしながら、実践的な知識と技術を培い、修士号の取得をめざし研究に励んでいる。

6 人と自然の博物館基本計画を策定！

平成 20 年 3 月に「新たな人と自然の博物館基本計画」が策定された。「新たな人と自然の博物館」基本構想に基づいて、今後のひとはくのあり方・方向性をより具体的な計画としたものである。策定にあたっては、ネクスト推進室が担当して、策定業者として株式会社丹青社が加わり、基本計画委員会で議論を深めて、基本計画を策定した。

基本計画の中では、利用者の見る、聞くのみの展示だけでなく、利用者とモノの間に人が介在する「演示」が重要であり、「演示」は関心の薄い人の興味を誘発し、利用者の積極的な活動への参加を促す効果があり、新しいひとはくにおいて重要な手法であると結論された。演示を行うのは、ひとはくの研究員がのみ行うのでなく、ひとはくとともに活動する「担い手」の重要性にも示された。

「演示」「担い手」などソフト面の充実のために、大空間展示ゾーン、県民ラボ・担い手グループゾーンなどを含む 6,100 ㎡の新館が提案されている。さらに新館ができるまでに、演示の試行や担い手の育成を先行する計画を提示している。このような新たなひとはくは、 知の体験を通して環境優先社会の実現を目指していくものである。

7 キャラバン事業と総合共同研究を統合、地域研究員の養成を重点化！

「ひとはくキャラバン」は、平成18年までの5年間に約70会場で開催され、約52万人の方々に地域の自然・環境・文化に触れる機会を提供してきた。しかし、兵庫県民 560万人すべての方に提供するにはまだまだ活動が足りない。ひとはくの研究員の人数も限られており、これをひとはくだけで成し遂げるには力不足である。

そこで、ひとはくは平成19年度からは、キャラバンを、地元の自然・環境・文化を伝える活動の中心となる人々を支え、活動の輪を広げるための長期・地域密着型の事業に衣がえした。県下5地域で3年間の継続したプログラムを実施し、地域の方が自ら情報発信する力を身につけることのできるメニューを提供する。またその地域を深く知るための研究活動も促進し、地域から魅力的な“自然・環境・文化”の情報を地域の方々とともに発信できるよう体制を整えた。19年度は地域での研究素材の原石を探すことに力を入れ、平成20年度からは成果を得るために磨きをかけてゆくことになる。ひょうごに住む一人一人にそのすばらしさが伝わるような、そんな新しい「ひとはくキャラバン」の活動にご期待いただきたい。

8 マレーシア国立サバ大学との学術交流協定を更新！

New Sabah Times HOME Monday July 30, 2007 5

Establish Centre of Excellence, minister urges local universities

M'sia has strict standards for foreign medicinal products

ひとはくとマレーシア国立サバ大学は1997年6月14日に国際学術交流協定を締結し、この協定にもとづいてこれまで共同学術調査、ジャングル体験スクール、淡路花博での熱帯雨林展示、JICA の海外協力事業への協力など、さまざまな事業を実施してきた。この交流協定は5年間の協定で、2002年に1回目の更新が行われた。本年が2回目の更新の年にあたり、7月29日調印式がサバ大学で行われた。セレモニーにはマレーシア政府の高等教育局長らが招かれ、盛大に行われた。調印式の様子はサバ州の新聞にも大きく取り上げられた。ひとはくからは岩槻邦男館長と坂本啓次長が出席し、岩槻館長とサバ大学のモハッド・ノー・ダリミン学長が協定書にサインをした。この学術交流協定は、ひとはくの学術研究や普及教育活動を推進するうえでたいへん良い効果をもたらしており、今後も両者の良好な関係維持が期待される。

9 共生のひろばでの発表数が４６件（昨年度３４件）、聴講者は２０５人に！

人と自然の博物館では毎年2月11日に、各地域でひとはくの研究員と連携して様々な活動を行っているグループや個人による日頃の研究や活動成果の発表の場として、「共生のひろば」を開催している。一昨年に始まり、2008年で3回目となった。発表の数は年々増加して、今回は口頭発表が19件、ポスターや作品の展示などによる発表が26件にもなっている。参加者数も一般の聴講者を含めては200人を超えるほどになった。昨年までは博物館4階の大セミナー室で大勢の立ち見に囲まれながら発表が行われていたが、今回は参加者のさらなる増加が予想されたため、思い切って会場をホロンピアホールとした。そのせいか聴講者もゆったりと発表に集中することができた。発表会終了後に行われた茶話会では、特に優秀な発表に贈られる館長賞が口頭で2件、ポスター・展示で1件、ユニークな発表に対して贈られる名誉館長賞が口頭、ポスター・展示各2件に贈呈され、多くの参加者の拍手を浴びていた（下表）。

名誉館長賞	口頭	網を持って逆瀬川へ行こう！～家族で燃えたミヤマアカネ・マーキング2007～	清水知子・清水政志・清水　要・清水　円（あかねちゃんクラブ）
	口頭	run♪run♪plazaが拓くジュニアナチュラリストの未来	小西真弓（run♪run♪plaza）
	ポスター	空木（うつぎ）という名の植物　～茎の中は空洞か？～	西野眞美（植物リサーチクラブ）
	ポスター	鳴く虫マップ2007　神戸市北区道場町日下部の有野川周辺	宮武美恵子（鳴く虫研究会「きんひばり」）
館長賞	口頭	亜熱帯性の蛾イチジクヒトリモドキの兵庫県姫路市における発生状況	古部晋一郎（テネラル）
	口頭	有馬富士公園湿地ゾーンにおけるインタープリテーションの提案	大根裕士・神田将史　高橋俊介・福永一登（兵庫県立淡路景観園芸学校），田中沙紀・久保友美・小室宏美・野下彩香・古川舞美・山脇麻代（神戸学院大学）
	ポスター	平成19年度湿地管理に関する勉強会　いのちの宝庫・湿地	西村朱吉史・荒川秀夫・小谷繁子・武田禎子・松原朋恵・宮村良雄（平成19年度湿地管理に関する勉強会受講生）

10 兵庫県立大学附属中学校との連携を強化！

平成19年6月13日、人と自然の博物館は兵庫県立大学附属中学校と「総合的な自然・環境学習プログラムの研究開発・実践研究に関する協定書」の調印式を行った。

平成19年4月に開校した県立大学附属中学校は、特色ある教育課程や県立大学との連携の充実を図り、生徒の個性を生かした主体的な学びを促し、研究心旺盛で創造力溢れる生徒の育成をめざす県下唯一の併設型中高一貫校である。

この協定により、広く県下の学校教育や社会教育の充実に資するため、自然や環境について強い興味・関心を持ち、専門的な学習に取り組む能力と意欲を有する生徒の育成をめざし、ひとはくの有する知的資源と県立大学附属中学校の学校教育環境の連携によって、総合的な自然・環境学習プログラムの研究開発とその実践研究に両者協力して取り組むことに合意した。

11 人博収蔵資料目録第６集「佐藤コレクション目録ーアジア・アフリカ産フタオチョウ標本」の出版！

佐藤コレクションは、京都市在住の佐藤英次氏から 1992 年、2005 年、2006 年の三次にわたって人と自然の博物館に寄贈いただいたフタオチョウ類標本 5、000 点を超える兵庫県立人と自然の博物館収蔵資料である。フタオチョウはタテハチョウ科の１亜科 Charaxinae であり、名前が示す通りこのグループの種の多くでは、左右の後翅に２つの尾状突起を持っている。大型で美麗な種が多いことから、世界中のチョウ愛好者の注目を集めるグループである。今回、本コレクションからアフリカ、アジア、オセアニア地域、およびその間に存在する多数の島嶼に産する Charaxes 属および Polyura 属のフタオチョウ類 182 種、488 亜種の標本データを人博収蔵目録として出版することとなった。本冊子には標本データに合わせて、480 点のフタオチョウ標本カラー画像（翅表・裏）を掲載しており、現在の日本におけるフタオチョウ類資料目録としては最も充実したものと考えられる。研究や普及活動の資料として、ご活用いただければ幸いである。

事業報告

人と自然の博物館では、その活動内容をよりわかりやすくかつ明確にするために、平成 14 年度から「中期目標」と「措置」を設けている。中期目標は、いわば博物館の行動の指針となる大項目であり、これが全部で 9 項目設けられており、それぞれに達成を目指すべき目標値（指標）が設定されている。そして、この中期目標の各項目の下位項目として「措置」が設定されている。措置では、中期目標の達成と博物館活動の活性化に資する具体的な項目について、その行動の方針と、具体的な数値目標が設定されている。

次ページ以降の図表および解説は、中期目標の各項目に即して、平成 19 年度の博物館の活動内容とその自己評価、および平成 20 年度の事業計画を整理したものである。また、中期目標を支える措置の項目については、それぞれについての目標値・実績・達成度（%）を示した。

なお、平成 19 年度の中期目標と指標、および措置は、平成 14 年度から平成 18 年度の活動成果をふまえて、さらに社会のニーズへの対応を考慮して作成した検討案である。平成 20 年度は、平成 19 年度の実績や達成状況、博物館の将来構想を吟味したうえで中期目標と措置の最終案を設定し、それに従って事業を進めていく。

Ⅰ 研　究

「新たな博物館基本構想」の実現に向け、新しいプログラムやコンテンツ開発、生涯学習支援・シンクタンク活動の基礎となる研究を遂行する

1 兵庫から世界を対象に自然・環境に関する調査研究を行い、その成果をフィードバックする。

指標１：学術論文数
学会誌等審査付き論文の本数
指標２：一般向け著書・総説その他数
自費出版以外の一般向け著書、雑誌・新聞等への執筆数

担当課室
研究開発会議

学術論文数

達成度
目標　40 本／年 に対して

１１０．０ ％
（４４本）

一般向け著書 総説・その他数

達成度
目標　120 本／年 に対して

４８．３ ％
（５８本）

解　説

①H19 年度の取り組み
人と自然の共生に関する研究を推進するため、各研究員が年間に最低 1 本の学術論文を執筆し、その成果を世に発信するべく年間 3 本程度の一般向け著作を書くことを目標にして、共同研究等にとりくんだ。

②H19 年度の到達状況の自己評価
学術論文数は目標を達成できたが、一般向け著作数は達成できなかった。研究員が依頼原稿を積極的に執筆したり、執筆のチャンスを積極的に獲得したりする姿勢が必要である。

③H20 年度の取り組みの予定
研究員の執筆意欲をたかめるべく、学術交流の推進・競争的研究資金の獲得・国際共同研究の推進などを進める。

◆ 研究・資料を支える項目と目標値・達成度 ◆

項　目	研究関連の項目					
	学術論文本数	一般向け著書（総説･その他）本数	学会発表件数	研究助成金獲得		学会役員等の件数
				金額（万円）	件数	
目標値	40	120	80	2000	10	40
実　績	44	58	29	3195.9	35	47
達成度（%）	110.0	48.3	36.3	159.8	350.0	117.5

項　目	資料関連の項目					
	館員採集資料受入件数	寄贈資料受入件数	資料登録件数	収蔵資料貸出件数	収蔵資料のキャラバン展示件数	マルチメディアデータ等貸出件数
目標値	10	10	10000	10	10	10
実　績	4	29	10609	16	7	14
達成度（%）	40.0	290.0	106.1	160.0	70.0	140.0

項　目	資料関連の項目			
	収蔵庫利用者人数（人）	貸出可能な資料･教材の開発件数	資料目録等の出版冊数	連携ネットワークへの公開データ件数
目標値	1000	1	1（H23 年度までに 5）	10000
実　績	1228	0	1	20000
達成度（%）	122.8	0.0	25.0	200.0

（注）網掛け部は未達成の項目である.

Ⅱ 資　料

「新たな博物館基本構想」の実現に向け、特色ある質の高い資料を収集し、整備し、利活用を図る

1 質の高い資料の収集とその利活用を積極的に推進する。

指標１：寄贈・館員採集資料受入件数
指標２：資料の登録件数
指標３：資料の利活用件数
収蔵資料の研究・普及教育事業への貸出や展示利用件数
指標４：資料の公開促進件数
資料目録等の出版冊数

担当課室
研究開発会議

寄贈・館員採集資料受入件数

達成度

目標　20 件／年 に対して

１６５．０ ％（３３件）

資料の登録件数

達成度

目標　10000 件／年 に対して

１０６．１ ％（10609 件）

資料の利活用件数

達成度

目標　30 件／年 に対して

１２３．３ ％（３７件）

資料の公開促進件数

達成度

目標　H23 年度までに５件に対して

２０．０ ％（１件）

解　説

①H19 年度の取り組み

資料および各種の情報を効率よく収集・保存・活用すべく、受け入れから発信にいたるシステム整備に力をそそいだ。

また、博物館協議会等の組織の力をかりて、資料・情報整備の動機付けをおこなった。

②H19 年度の到達状況の自己評価

受入数は目標を大きく上回り、登録・利活用ともに目標値を達成できたが、公開促進件数は目標を大きく下回った。

受け入れから発信にいたるシステム整備が功を奏したと考えられるが、努力目標が残ったと考える。

③H20 年度の取り組みの予定

引き続きシステム整備・効率化・スリム化を進めるが、発信にいたらないと資料・情報の価値が十分生かされない、という意識を館員が共有する必要があり、資料にかかわる館内組織の整備・効率化・スリム化を進める。

■ 指標実績値の算出根拠 ■

寄贈・館員採集資料受入件数：寄贈資料受入件数（29 件）＋館員採集資料受入件数（4 件）

資料の利活用件数：収蔵資料の貸出件数（16 件）＋キャラバン展示件数（7件）＋マルチメディアデータ等貸出件数（14 件）

Ⅲ 生涯学習の支援

県民個々のニーズにきめ細かく対応するとともに、「新たな博物館基本構想」を共に実現する「担い手」を養成する

1 県民の生涯学習に即した段階的・連続的な自然・環境に関する学習プログラムを提供し、参加者数、参加者層を拡大する。

指標１：企画展等の開催数
博物館で開催する企画展，トピックス展，ミニ企画展，他団体との共催展示の開催件数
指標２：「演示」プログラム件数

担当課室
生涯学習推進室

企画展等の開催数

達成度

目標　20 件／年　に対して

１０５．０ ％（２１件）

「演示」プログラム件数

達成度

目標　50 件／年　に対して

９８．０ ％（４９件）

解　説

①H19 年度の取り組み
　来館者サービスとして、オープンセミナーや企画展等（トピックス展やミニ企画展を含む）を数多く開催した。そのことを通じて、来館者に自然や環境への関心と学習意欲を喚起し、学習プログラムへの再参加を促すことに取り組んだ。

②H19 年度の到達状況の自己評価
　企画展等の開催数は目標を達成した。一方、オープンセミナーでは「人が介在する」学習プログラムの提供を心がけ、今後の事業活動の主眼となる「演示」を意識した活動を展開した。

③H20 年度の取り組みの予定
　ひとはくサロンに「演示」を主目的としたスペース（正式名称は検討中）ができたことから、この一年間さまざまな活用方法を試行し、スペースの効果的な運用と演示の内容などを検討する。

◆ この指標を支える項目と目標値・達成度 ◆

項　目	生涯学習支援関連の項目				
	実入館者数（人）	観覧料収入（円）	学習プログラム参加者数（人）	オープンセミナー等イベント参加者数（人）	ひとはくフェスティバル参加者数（人）
目標値	150,000	6,000,000	5,000	20,000	20,000
実　績	111,595	8,662,700	5,209	26,540	15,439
達成度（%）	74.4	144.4	104.2	132.7	77.2

項　目	生涯学習支援関連の項目				
	年間相談件数（BBS）	特注セミナー数	講師派遣件数	体験学習（トライやる等）受入人日	各種研修受入人日
目標値	450	300	200	150	100
実　績	276	329	241	124	75
達成度（%）	61.3	109.7	120.5	82.7	75.0

Ⅲ 生涯学習の支援

県民個々のニーズにきめ細かく対応するとともに、「新たな博物館基本構想」を共に実現する「担い手」を養成する

2 県民の生涯学習に即した段階的・連続的な自然・環境に関する学習プログラムを提供し、参加者数、参加者層を拡大する。

指標 3：ビジター数
指標 4：学校団体来館件数
指標 5：県民からのリクエスト対応件数
BBS による相談件数と特注セミナー開催件数

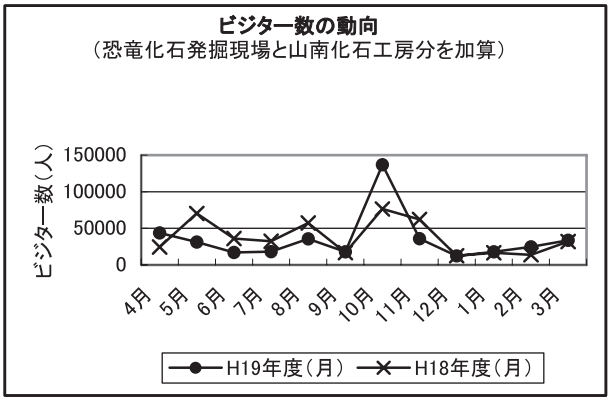
担当課室
生　涯
学習課

ビジター数

達成度

目標　300,000 人／年　に対して

142.0 %（426,139人）



学校団体来館件数

達成度

目標　300 校／年　に対して

103.0 %（309校）

内訳：幼稚園・保育園 40 校、小・中・高・大学等が 269 校

県民からのリクエスト対応件数

達成度

目標　500 件／年　に対して

121.0 %（605件）

内訳：BBS による相談件数 276 件、特注セミナー開催件数 329 件

解　説

①H19 年度の取り組み

館内でのオープンセミナー、特注セミナーの開催数を増やし、下見時に紹介するとともに、その広報にも努めた。

館外でも丹波の恐竜化石の発掘調査を公開し、12 月からはクリーニング作業を公開で行う「ひとはく恐竜ラボ・山南ルーム」のオープンなどを広く広報した。

②H19 年度の到達状況の自己評価

本館では特注セミナーの開催数を増やし、館外では共催事業、丹波の恐竜化石の発掘調査やクリーニング作業の公開などにより、ビジター数は目標を超えた。

学校団体の入館も、見学だけでなくセミナー受講が定着しつつあり、昨年度以上の来館があった。

③H20 年度の取り組みの予定

丹波の恐竜化石展示、「ひとはく恐竜ラボ」の紹介、さらに「ファーブルにまなぶ展」などの広報を充実させて来館者増に努める。

また、特注セミナーを受講していただきやすくするため「ひとはく手帖」をわかりやすく編集した。下見等でも紹介してビジター数、団体数の確保に努める。

Ⅲ 生涯学習の支援

県民個々のニーズにきめ細かく対応するとともに、「新たな博物館基本構想」を共に実現する「担い手」を養成する

3 新たな博物館構想の実現に向けて、「担い手」を養成し、その活動を支援する。

指標１：担い手の活動数（人日）
地域研究員・連携活動グループ会員の来館人日、担い手と館員の連携事業への参加者数、体験学習や各種研修の受入人数の総計

指標２：担い手の登録人数
地域研究員登録者数と連携活動グループ登録会員数

担当課室
生涯学習推進室

担い手の活動数

達成度

目標　5000 人日／年 に対して

５０．０％（２４９７人日）

担い手の登録人数

達成度

目標
H23 年度までに 500 人 に対して

６４．０％（３１９人）

解　説

①H19 年度の取り組み
　地域研究員制度に関して懸案となっていた設置要綱の確定を最重点課題とした。地域研究員および上級地域研究員の定義と基準を明確化し、協力協定の締結と認定までの手続きを整備することに取り組んだ。

②H19 年度の到達状況の自己評価
　連携活動グループは５件の新規登録があり、担い手の登録人数は 319 人（達成度 64%）に達した。しかしその一方で、地域研究員登録者数は伸び悩んだ。地域研究員・上級地域研究員制度の設置要綱を整備したことで、今後は登録者数が増加するものと思われる。

③H20 年度の取り組みの予定
　共生博物館地域研究員養成事業として、第４回「共生のひろば」を開催するとともに、これまでの「共生のひろば」での発表者を中心に地域研究員への登録を働きかける。この事業が県の重要施策として最終年を迎えることから、次年度以降の事業のあり方を検討する。

◆ この指標を支える項目と目標値・達成度 ◆

項　目	生涯学習支援関連の項目					
	地域研究員の来館人日	連携活動グループ会員来館人日	担い手と館員の連携事業への参加者数	共生のひろばでの発表件数	地域研究員養成講座開催日数	地域研究員養成講座参加者数
目標値	750	4,000	100	50	20	200
実　績	68	2,085	145	46	75	2,354
達成度（%）	9.1	52.1	145.0	92.0	375.0	1177.0

項　目	生涯学習支援関連の項目						
	セミナークラブ会員		地域研究員		連携活動グループ		
	新規登録数	累計数	新規登録数	累計数	新規登録数	累計数	登録会員数累計
目標値	200	3,000	40	100	5	40	400
実　績	246	2,410	3	8	5	15	311
達成度（%）	123.0	80.3	7.5	8.0	100.0	37.5	77.8

■ 累計目標値について ■
セミナークラブ会員・地域研究員・連携活動グループの累計目標値は、平成 23 年度末までに達成することを想定した数値である。

Ⅳ シンクタンク活動の支援

共に考え、共に行動する総合的なコミュニティシンクタンクを目指す

1

自然・環境に関する県政課題に対して、適切な助言や提言等を行う。また企業や行政団体等からの依頼に応じて調査研究を実施する。

指標１：県政に対する貢献度
県政関連の委員会等への参画数、県職員等の相談件数
指標２：県政課題論文著書等数
県政課題に関連する論文著書、その他著作、研究発表等の総数
指標３：受託研究件数
指標４：植物の育成、種子保存等についてのノウハウ提供依頼件数

担当課室
シンクタンク
事業室

県政に対する貢献度

達成度
目標　300 件／年　に対して
４５４．７ ％（１，３６４件）
内訳：
県政関連委員会等への参画数 289 件、県職員等の相談件数 1,075 件

県政課題論文著書等数

達成度
目標　80 件／年　に対して
１０３．８ ％（８３件）
内訳：論文著書 42 本、その他著作 22 本、研究発表 19 件

受託研究件数

達成度
目標　10 件／年　に対して
１９０．０ ％（１９件）
受託研究の総額は 13,251,000 円

植物の育成、種子保存等についてのノウハウ提供依頼件数

達成度
目標　30 件／年　に対して
１４３．３ ％（４３件）

解　説

①H19 年度の取り組み
　県関連部局委員会への学識経験者としての参画を促した。また、学術論文発表後にそれをかみ砕いて県民の自然環境に関する理解を深める普及啓発誌への執筆を勧めた。
　関連部局や企業とともに地域の問題を解決する受託研究の受諾を促した。

②H19 年度の到達状況の自己評価
　県関連部局職員への相談対応件数や委員会への参画数、受託研究数、ジーンバンク対応件数（植物の育成、種子保存等についてのノウハウ提供件数）については、博物館のシンクタンク機能を十分に果たした。
　県政課題論文数に関しては、目標に達してはいるが不十分である。

③H20 年度の取り組みの予定
　発表学術論文をもとにその社会的意義を広く県民に周知していただくため、普及啓発誌での公表を促進する。
　県の財政改革の進行に伴い、博物館の基礎研究・資料収集・情報収集といった基本活動に資金面での支障が出ることのないよう、研究活動等に外部資金の導入をさらに進める。

◆ この指標を支える項目と目標値・達成度 ◆

市町等との協力協定締結件数
　目標値：1 件／年　　実　績：1 件（恐竜化石の発掘や活用等に関する丹波市との協定）　　達成度：100.0 ％

Ⅳ シンクタンク活動の支援

共に考え、共に行動する総合的なコミュニティシンクタンクを目指す

2 他館、他団体、NPO 等との交流・連携を促進し、博物館事業の活性化を図る。

指標 1：他館、他団体、NPO 等との連携プログラム数

担当課室
シンクタンク
事業室

他館、他団体、NPO 等との連携プログラム数

達成度

目標　80 件／年　に対して

１０６．３ ％（８５件）

内訳：
共催事業 19 件、
協力事業 44 件、
後援事業 3 件、
キャラバン事業数 19 件

解　説

①H19 年度の取り組み
　総合共同研究と連動したキャラバンを県下 5 地域で展開することにより、今年度は地域問題の具体化、またそれを博物館と共に解決する地域研究員・連携活動グループの発掘を開始した。
　講師派遣などに対して、個人として対応するのではなく、連携事業と位置づけることを勧めた。

②H19 年度の到達状況の自己評価
　連携事業の総数としては目標をかろうじて達成した。ただ共催事業・後援事業・NPO 等との連携事業は目標値を下回っている。特に共催事業数は目標値の半数程度で、連携相手先から見て博物館のシンクタンク機能がまだ十分に認知されていないことを示しており、営業活動が必要である。

③H20 年度の取り組みの予定
　総合共同研究と連動したキャラバンをさらに進化させ、地域が抱える課題を共に解決する仕組みを構築・実践する際の一つのメニューとして、地域研究員・連携活動グループとの共催事業を位置づけ推進する。
　次年度の事業が具体化し始める秋季に連携相手先と事業の調整を進める。

◆ この指標を支える項目と目標値・達成度 ◆

項　目	内　容	目標値	実　績	達成度（%）
共催事業件数	博物館と他館、他団体等との共催事業	30	19	63.3
協力事業件数	博物館と他館、他団体等との協力事業	30	44	146.7
後援事業件数	他館、他団体等の事業への後援数	10	3	30.0
キャラバン事業数	キャラバン、ミニキャラバン等の実施数	10	19	190.0
県民・NPO 等との連携事業件数	上記の 4 事業中で県民・NPO 等と連携して行う事業数	30	23	76.7
地域研究員養成講座開催日数	県内5つの地域で主に行う地域研究員養成講座の開催日数	20	75	375.0
地域研究員養成講座参加者人日	同上への参加者総数（人日）	200	2,354	1177.0

V マーケティングおよびマネジメント

効果的で健全な運営を行い、全ての人に利用される博物館を目指す

1 広く県民の博物館事業への理解を醸成するとともに、博物館を活用する気運を拡大する。

指標 1：知名度 50%の達成度
指標 2：ホームページアクセス件数
指標 3：メディア等出演件数

担当課室
企画調整室

知名度 50%の達成度

達成度

目標　50%　に対して

98.2 %（49.1%）

ホームページ アクセス件数

達成度

目標　200,000 件／年　に対して

94.1 %（188,247件）

メディア等出演件数

達成度

目標　300 件／年　に対して

183.0 %（549件）

内訳：
新聞雑誌等掲載数 500 件、
テレビ・ラジオ等出演件数 49 件

解　説

①H19 年度の取り組み

三田、西播磨、丹波地域での知名度調査を行った。これらはフェスティバルという特殊条件下だったためか、71～89%という高い値が得られた。その後、三宮での同様の調査では約 20%であった。

これらの調査の妥当性が不明のため、本年度の知名度は前年度までの調査値（49.1%）のままとした。

②H19 年度の到達状況の自己評価

本年度も恐竜化石に関連した新事実の発表や展示会などにより、メディアへの露出件数がかなり増加し、知名度は確実に上がっていると思われる。一方でホームページのアクセス件数が上がらなかったのは、更新件数が少なかったためと思われる。

③H20 年度の取り組みの予定

恐竜化石、ファーブル展、生物多様性関連事業等により、引き続きメディアへの露出の増加が期待できる。またホームページの更新回数の増加等により、知名度のさらなる向上に努める。

知名度については、より信頼度の高い数値が得られる方法を検討していく。

◆ この指標を支える項目と目標値・達成度 ◆

項　目	マーケティングおよびマネジメント関連の項目				
	メールマガジン購読者件数	館内情報端末利用件数	ホームページ更新件数	新聞雑誌等掲載件数	テレビ・ラジオ等出演件数
目標値	1,000	500,000	250	250	50
実　績	965	434,572	436	500	49
達成度（%）	96.5	86.9	174.4	200.0	98.0

■ 累計目標値について ■

メールマガジン購読者件数の目標値は、平成 23 年度末までに達成することを想定した数値（累計）である。

V マーケティングおよびマネジメント

効果的で健全な運営を行い、全ての人に利用される博物館を目指す

2 効率的で健全な博物館運営を目指す。

指標 1：二酸化炭素排出量の削減
指標 2：外部資金の獲得金額
指標 3：中期目標の達成度

担当課室
企画調整室

二酸化炭素排出量の削減

達成度
目標　前年度比 100%未満に対して
前年度比 ９４．０ ％ → 達成

外部資金の獲得金額

達成度
目標　20,000,000 円／年　に対して
１７０.８ ％ (34,159,000 円)
内訳：
文部科学省科学研究費補助金等の研究助成金 18,708,000 円、受託研究 13,251,000 円、教育普及等事業への助成金 2,200,000 円

中期目標の達成度

達成度
目標　評価可能な指標の 80%以上を達成に対して
７６．２ ％ → 未達成

評価可能な指標 21 個の中の 16 個について目標値を達成

解　説

①H19 年度の取り組み
新しい中期目標で動き始めた。今回は昨年度までの中期目標で弱かった資料と研究を分離した。
全体に指標数を増やしたので達成の難易度は少し高くなった。指標の数と目標値の設定は暫定的なもので動かざるを得なかった。

②H19 年度の到達状況の自己評価
暫定的な目標ではあったが、全体的な指標の達成度はおおむね期待の応えられるものだったと思われる。ただし個別にみると、一般向け著書に関する指標や担い手の活動に関する指標が低い。
自身の仕事の達成だけで満足せず、一般向け事業へとさらに一段の発展を進める必要がある。

③H20 年度の取り組みの予定
中期目標のとくに指標の数と目標値の設定を見直して、暫定版から正式版へ確定させる。それをもって外部評価委員会による評価点検を実施する。

◆ この指標を支える項目と目標値・達成度 ◆

項　目	マーケティングおよびマネジメント関連の項目					
	受託研究		教育普及等の事業への助成金		研究助成金	
	件数	金額(円)	件数	金額(円)	件数	金額(円)
目標値	10	10,000,000	5	−	10	10,000,000
実　績	19	13,251,000	3	2,200,000	16	18,708,000
達成度(%)	190.0	132.5	60.0	−	160.0	187.1

■ 二酸化炭素排出量について ■
二酸化炭素排出量は下記の換算式に基づいて算出し、前年度分との比較を行っている。
二酸化炭素排出量＝0.36×電気使用量(kwh)＋0.36×水道使用量(m^3)＋2.29×ガス使用量(m^3)